



第272号

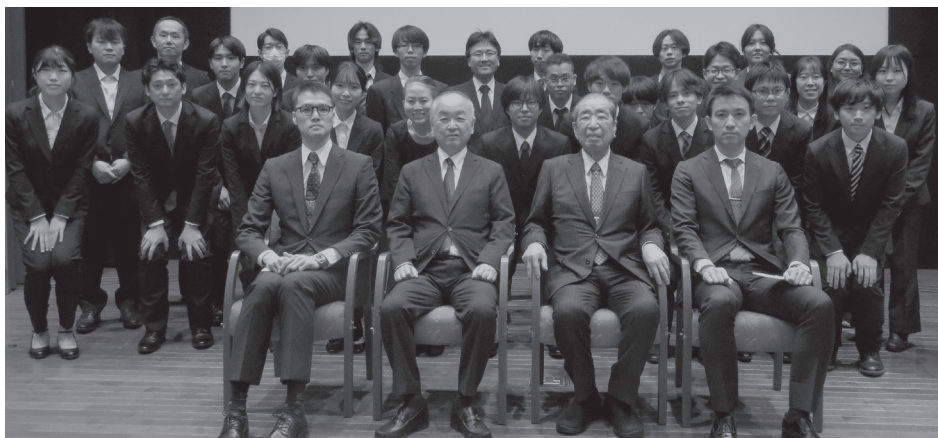
公益社団法人
医学振興
銀杏会

(編集同人)

荻原俊男 米田正太郎
杉本 央 富田尚裕
上田啓次 朝野和典
木村 正 森井英一
日比野浩 久保盾貴
馬場幸子

令和
7年度

医学振興銀杏会総会を開催



(地域医療に関する研究助成、学友会奨学金、岸本基金奨学助成金) 採択者一同と、吉川理事長、岸本名誉理事長

令和7年度医学振興銀杏会総会(定時社員総会)は、5月31日(土)に銀杏会館にて開催された。開会に先立ち、医学部正面にある佐多・楠本両博士の胸像に対し、役員および顧問が献花し、記念撮影が行われた。

総会では、金倉譲副理事長の司会により、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で進行さ

れた。全286名の代議員のうち、約79%に相当する228名から書面による議決権行使があり、総会が成立したことが報告された。

吉川秀樹理事長からは、新型コロナウイルス感染症の影響で令和元年を最後に中止されていた級会・支部交流会が、本年6年ぶりに開催された旨が述べられた。続いて、昨年の総会以降に逝去された103名への追悼、また勲章・褒章受章者ならびに学術賞受賞者への慶賀が表された。

議事においては、渡邊幹夫理事から前年度の事業報告お

よび収支決算報告が、山西弘一監事から会計監査報告が行われ、いずれも承認された。また、今年度の事業計画および収支予算の報告がなされた。任期満了となる役員の交代に伴う次期役員も承認された。

続いて、寄附の報告の後、助成金の授与式が森井英一理事の司会でされた。地域医療に関する研究助成の採択者2名および学友会奨学金採択者15名に対し、吉川理事長から目録が授与された。さらに、岸本基金奨学助成金採択者12名に対し、岸本忠三名誉理事長より目録が授与され、若い世代への激励の言葉が贈られた。

休憩後には、国立精神・神経医療研究センター病院の戸田達史先生が「『なならない』から『なおる』へー難病の病態解明と核酸医薬による分子標的治療ー」と題した講演を行い、活発な質疑応答が続いた。その後、学内の現状と展望について、石井優研究科長、野々村祝夫病院長、石田隆行保健学科長、高倉伸幸微生物病研究所副所長、深川竜郎生命機能研究科長から報告された。最後に吉川理事長が、今後の本学および本会の更なる発展を祈念して閉会した。

岡崎周平(平14)

研究助成の公募

当会では、今年度も公益事業の一環として、下記の研究助成を行います。

(連絡先)

FAX 06-6879-3503

Mail office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

▶地域医療に関する研究助成

対象 地域医療に貢献している病院・施設で行われている疾病の診断・治療に関する研究をしている若手研究者(40歳未満)への助成

募集期間 9月1日～11月30日

助成額 1件50万円程度

助成件数 3～4件

▶国際学術交流助成(後期分)

対象 外国で行われる国際学会等(9月1日～令和8年3月31日の間に行うもの)において成果発表をされる若手研究者への渡航費用助成。詳細は、当会ホームページ(<https://www.ichou.or.jp>)をご覧ください。

募集期間 10月1日～11月30日

第37回 医学振興銀杏会シンポジウム

開催日 令和7年10月3日(金)午後3時開会

会場 銀杏会館3階 阪急・三和ホール

テーマ AI医学のこれからー研究からAIホスピタルの実装を目指してー

[コーディネーター] 樂木宏実先生(副理事長、大阪労災病院 総長)

川崎 良先生(大阪大学教授 公衆衛生学)

[基調講演] 川上英良先生(理化学研究所 数理創造研究センター・生命医学研究センター チームディレクター)

[パネルディスカッション] 阪大病院AIホスピタルの実装への道のり

司会: 樂木宏実先生(副理事長)、土岐祐一郎先生(大阪大学教授 消化器外科学)

川崎 良先生(大阪大学教授 公衆衛生学)

織田 順先生(大阪大学教授 救急医学)

山本浩一先生(大阪大学教授 老年・総合内科学)

(要旨)日常の様々な場面でAIが使われるようになってきました。近い将来に全国の医療機関で診断や治療補助をはじめ様々な形でAI技術が取り入れられ、医療形態も大きく変化すると思われます。基調講演は、本分野で最も幅広いご見識とご経験をお持ちの川上先生にお願いしました。ディスカッションでは、阪大病院AIホスピタルに関する取り組みについて、音声入力救急システムやフレイル自動診断システムをご紹介します。地域医療の近未来像を実感して頂ければ幸いです。

※参加ご希望の方は、事務局までお問合せください。[TEL 06-6879-3501]

級会・支部交流会が6年ぶりに開催されました

令和元年を最後にコロナ禍のために開催を見送られていた級会・支部交流会が、5月31日の総会に合わせて6年ぶりに開催されました。各級会・支部の活動をご報告いただき、懇親を深めていただく機会として必須の集まりですので、ふたたび多くの会員の先生方とお会いできるようになり、喜んでいただけたかと思います。

当日は級会代表や級会世話人、支部長や支部世話人、医学部各教室世話人、そして学友会の役員をあわせて合計55名のご参加で、会場の会議室が満席になる盛況でした。ご出席の最高齢は昭和26年卒の御年99歳、最年少は令和2年卒、70歳以上の年齢差のある先生方が一堂に会されたことになり、本会の歴史と結束を再認識することができました。

吉川秀樹理事長のあいさつのあと、藤本美穂監事(平5)の司会で、参加された先生方からのご挨拶と報告を順次いただきました。支部の活動報告では、大人数の支部も小規模な支部もそれぞれ工夫して集まりを企画されていました。級会からもそれぞれの年齢層に応じた活動のお話をきくことができ、最年少の級会は卒業時がコロナ禍で謝恩会もできず、その後もあまり集まりも企画していないが、諸先輩の級会の活発な活

動報告に刺激されたとの感想がありました。また、臨床系の教室からは、つい先日オープンした阪大病院の新しい診療棟に関する話題も報告されました。多くの先生方にご参加でしたが、みなさまのご協力により、出席されたすべての支部・級会・教室のご報告をいただき時間内に終わることができました。全員の報告終了後、会場の中に見つけた懐かしい恩師や部活の先輩後輩、ご友人に向かって走り寄る先生方の笑顔が眩しく、嬉しい光景でした。

総会行事終了後の懇親会を以前のように開催してほしいというご要望もいただいております。諸事情ございますが、理事会および事務局で検討してまいりたいと存じます。いずれにせよ、毎年5月最終土曜日は単なる法令上の総会のみではなく、会員の先生方の交流の場ともなるようにしてまいりたいと考えておりますので、来年以降も多くの先生方にお会いできることを楽しみにしております。

なお、代表者が誰か不明という級会があるようですが、事務局にお問い合わせいただければ現状をお伝え出来ます。ぜひお問い合わせください。

藤本美穂・渡邊幹夫(平5)



総長就任あいさつ



熊ノ郷 淳(平3)

大阪大学医学部学友会の皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。令和7年4月1日付で、第19代大阪大学総長を拝命いたしました熊ノ郷淳です。歴史と伝統ある大阪大学総長の重責を担うこととなり、身の引き締まる思いとともに、改めて本学の重みとその社会的使命を強く感じております。

大阪大学は、昭和6年に帝国大学として設立されましたが、その精神的源流は江戸時代の懷徳堂と適塾にあります。町人の学問所であった懷徳堂の「実学の精神」と、適塾に集った緒方洪庵や福澤諭吉らの「真理を求める自由闊達な気風」は、現代の大阪大学にも脈々と受け継がれています。そこでは「千日の勧学より一日の学匠」という言葉に象徴されるように、学びとは単に知識の蓄積ではなく、志ある師との出会いと、自ら問いを立てて深めていく過程にあります。そして「師を目指すなかれ、師が目指すものを目指せ」という言葉が示すように、学問の目的は、模倣にとどまらず、未来を切り拓くことにあります。

本学の理念「地域に生き世界に伸びる」は、第11代総長・山村雄一先生のもと、教職員による「将来構想会議」で議論が重ねられ、当時親交のあった作家・司馬遼太郎先生の助言も取り入れながら生まれたと伺っております。この標語には読点が入らず、「地域」と「世界」が切り離せない一体のものとして捉えられています。私たちは、地元・大阪や日本社会に根ざしながら、世界水準の教育と研究を通じて、広く人類社会に貢献していくことをめざしています。

現代社会は、超高齢化、少子化、労働人口の減少、地域社会の変容といった複合的な課題に直面しています。このような時代だからこそ、大学には、知の拠点としての役割がますます強く求めら

れています。大阪大学は、学問の真理を追究する使命に立脚しつつ、「世界トップレベルの研究」と「時代を超えて変わらない知の探究」を両立させ、社会課題に正面から向き合っておりま

す。なかでも本学の医学部・医学系研究科は、創設時から大阪大学の核を担ってきました。世界に誇る基礎医学と臨床医学の融合、最先端の医療技術の研究・開発は、国内外の医療・学術界に多大な影響を与えてきました。私自身も、免疫学の分野で長年研究に携わってまいりましたが、今後は総長として、医学研究を含めた「阪大の学問」のさらなる飛躍を図るとともに、それを担う次世代人材の育成に力を注いでまいります。

大阪大学は「実学の府」として、産業界との連携（産学連携）や、自治体・市民との共創（社学共創）にも力を入れております。大学の成果を社会に還元し、地域と共に成長していくことが、私たちの責務です。学問を実践に生かし、現場の課題解決に寄与する姿勢は、懷徳堂や適塾から連綿と続く大阪大学の矜持にほかなりません。

そして私は、阪大に集うすべての人々が、「道を楽しみ、学ぶは一生」という心を持ち続けてほしいと願っています。卒業してもなお学び続ける者こそが、社会に貢献し、新たな価値を生み出す存在となりうると考えます。

大阪大学の未来は、卒業生の皆様の歩みに支えられております。皆様が築き上げてこられた伝統と誇りを胸に、これからの時代にふさわしい阪大とともに創っていきたいと思っております。今後とも変わらぬご支援、ご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

- | | |
|-----------|--|
| ▷平成3年3月 | 大阪大学医学部卒業 |
| ▷平成9年3月 | 大阪大学大学院医学研究科
博士課程修了 |
| ▷平成9年8月 | 大阪大学微生物病研究所
助手に就任 |
| ▷平成15年12月 | 大阪大学微生物病研究所
助教授に就任 |
| ▷平成18年6月 | 大阪大学微生物病研究所
教授に就任 |
| ▷平成19年10月 | 大阪大学世界トップレベル研究拠点
免疫学フロンティア研究センター
教授に学内派遣 |
| ▷平成23年4月 | 大阪大学大学院医学系研究科
教授に就任 |
| ▷平成27年9月 | 大阪大学 副理事に就任
(～令和元年8月) |
| ▷令和3年4月 | 大阪大学大学院医学系研究科長・
医学部長及び総長参与に就任
(～令和7年3月) |
| ▷令和7年4月 | 大阪大学総長に就任 |

令和6年度 秋の叙勲

藍綬褒章 澤井貞子(昭59)
瑞宝小綬章 南波正宗(昭43)
旭日双光章 津森孝生(昭50・和医大)

令和7年度 春の叙勲

紫綬褒章 西田幸二(昭63)
瑞宝中綬章 田村進一(昭41・阪大基)
瑞宝中綬章 木下タロウ(昭49・東大農)

令和6年度 夏の受賞

高峰記念第一三共賞 竹田 潔(平4)

令和6年度 秋の受賞

(発表日順)

日本学術振興会賞 井上大地(平17・京大医)
ベルツ賞 戸田達史(昭60・東大医)
日本医師会医学賞 祖父江友孝(昭58)
日本医師会医学賞 木村 正(昭60)

令和7年度 春の受賞

文部科学大臣表彰 科学技術賞(研究部門)
石井 優(平10)

代議員選挙について

現代議員の任期は来年の定時社員総会終結をもって満了いたします。詳細につきましては、代議員選出管理委員からの公示文章、同封別紙「代議員への立候補・候補者ご推薦のお願い(公示)」をご覧ください。

新 役 員

(任期：2025年5月31日より2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時社員総会終結の時まで)

役職	卒年	氏 名
理事長	昭 54	吉川 秀樹
副理事長(総務)	昭 54	金倉 譲
副理事長(財務)	昭 56	米田 悦啓
副理事長(事業)	昭 59	樂木 宏実
業務執行理事(学術)	昭 55	富田 尚裕
理事	長崎大医 昭 59	朝野 和典
理事	昭 60	梶本 佳孝
業務執行理事(情報)	昭 60	北川 透
理事	昭 63	山本 晴子
理事	平元	真野 敏昭
業務執行理事(助成)	平 4	森井 英一
業務執行理事(会計)	平 5	渡邊 幹夫
業務執行理事(広報)	平 6	日比野 浩
業務執行理事(庶務)	平 14	岡崎 周平

役職	卒年	氏 名
業務執行理事(庶務)	平 14	小玉 尚宏
業務執行理事(広報)	平 16	馬場 幸子
理事	平 17	田中 聡司
業務執行理事(庶務)	平 17	大和 彩
業務執行理事(学術)	平 18	山本 琢磨
理事	平 28	城戸 完介
監事	昭 42	早石 雅宥
監事	昭 42	山西 弘一
監事	昭 53	三木 善次
監事	平 5	藤本 美穂
監事	平 5	三好 智満
顧問	昭 61	野々村 祝夫
顧問	平 10	石井 優

※顧問の任期は、医学部長・病院長の任期終了まで

寄 附 御 礼

令和7年4月8日から7月25日までに、1,190,000円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となっております。また、令和3年7月14日より当会は、寄附金に対してより有利な控除である税額控除制度が選択できる団体として認定されました。詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

木村正治先生(阪大医 昭26)より、20,000円をご寄附いただきました。
山西弘一先生(阪大医 昭42)より、100,000円をご寄附いただきました。
花房俊昭先生(阪大医 昭50)より、50,000円をご寄附いただきました。
堂前圭太郎先生(新潟大医 平17)より、30,000円をご寄附いただきました。
山分ネルソン祥興先生(阪大医 平17)より、10,000円をご寄附いただきました。
森本靖彦先生(阪大医 昭36)より、金一封をご寄附いただきました。
清野佳紀先生(阪大医 昭40)より、金一封をご寄附いただきました。
小浜譲次先生(阪大医 昭47)より、金一封をご寄附いただきました。
尾川裕史先生(阪大医 昭53)より、金一封をご寄附いただきました。
狭間敬憲先生(阪大医 昭53)より、金一封をご寄附いただきました。
樂木宏実先生(阪大医 昭59)より、金一封をご寄附いただきました。
三好智満先生(阪大医 平5)より、金一封をご寄附いただきました。
匿名の会員様より100,000円を1件、20,000円を1件、3名の会員様より金一封をご寄附いただきました。

医学部長通信 第28回 石井 優(平10)

アカデミック・フリーダム

もう30年ほど前、私は学部学生の頃にドイツのゲッティンゲンにサマースチューデントとして1ヶ月ほど滞りました。大学が有名で、可愛い木組みの家が並ぶこの小さな北ドイツの田舎町には、「G7=ゲッティンガー・ジーベン(ゲッティンゲンの七人)」という目を引くモニュメントが建てられています。19世紀中頃、自由主義の憲法を無効にして独裁政治を復活させようとした当時のハノーバー国王を批判したゲッティンゲン大学の7人の教授が、国王の圧力によって罷免されようとしたとき、大学の教授や学生が剣を抜いて国王軍と闘い、大学の自治・学問の自由を守ろうとしたそうです。現地の人と話していると、この歴史を大いに誇りに感じ、現在においても学問の自由を大切にしていることがわかります。

学問の自由とは、研究者が外的な干渉を受けることなく、自らの関心のみに基づいて真理を探究する権利とされています。マックス・ウェーバーは、大学における教育・研究について「事実には忠実であることと、倫理的判断の混同を避けること」が不可欠であると説いています。つまり、学問は特定の価値観に奉仕するのではなく、事実を明らかにし、その解釈を多様な視点から問い直す知的な営みであるべきとの考えです。そもそも科学とは、既存の知識を疑い、新たな視点を持ち込むことによって進歩してきました。古くはガリレオの地動説、ダーウィンの進化論、あるいは近代物理学理論など、いずれも当初は社会的通念や権威に対する挑戦であり、それらが受け入れられるには自由な知的空間の存在が必要でした。

現在、社会では、研究資源や環境に対する関心が高まる一方で、研究者が安心して自由に思考し、発言できる空間の重要性が見落とされてきたかもしれません。中でも最近のアメリカでは、政治的・社会的分断の深まりとともに、大学教員の研究・教育活動に対して公的な介入が強まっていることがニュースを騒がせています。個人的に聞き及ぶところでは、現地の状況は日本で報道されているよりも相当深刻なようです。

戦いの末、結局ゲッティンゲンを去ることになった7人の教授は他国で迎えられ、その学問の発展に貢献したことが史実として伝えられています。歴史は繰り返し、科学者は時に弾圧を受けながらも、学問はしなやかに発展し続けます。いまアメリカが冬の時代、日本、中でも大阪大学が「知の自由の砦」として学問の発展に貢献できればと考えています。

提

言

医師の理念のつながり ～洪庵先生から現代の医師法まで～

昨年のNHK朝ドラ「虎に翼」は、日本初の女性弁護士・裁判官である三淵嘉子さんをモデルとした作品でした。その中で、戦後の民法改正により男女不平等に関する様々な規定が撤廃される過程を扱っていました。戦前と戦後で価値観や法律が大きく変わった様子を見て、それでは医師法はどう変化したのかと調べてみると、興味深いことがわかりました。

まず男女平等の観点から見ると、明治7年の医制や明治39年の旧医師法では、民法とは対照的に性別による制限の明文規定はなかったことです。実際の運用では女性の受験が困難でしたが、荻野吟子先生らの努力により道が開かれていきました。

次に戦後の法改正という観点で、最も印象的なのは、第1条で医師の使命が明記されたことです。「医師は、医療及び保健指導を掌ることによつて公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するものとする」とあります。

この条文を読んで思い起こされるのが、緒方洪庵先生の「扶氏医戒之略」です。フーフェランド医師による医者への戒めを、洪庵先生が自身の思いも込めて和訳し整えたもので安政4年(1857年)に発表されました。こ

の医戒の第1条には「医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずということを其の本旨とす」と医師としての使命がその公共性にあることについて述べています。約90年の時を隔てた法律と、驚くほど符号する理念です。また、洪庵先生が重視した継続的研鑽についても、現行医師法第1条の2で「医師がその資質の向上を図ることができるよう」社会全体で支援すべきとしており、一貫しています。

適塾の門下生が明治維新後の医学界を担い、その思想は医学教育に深く浸透していったことはよく知られていますが、洪庵先生の教えは、明治39年の旧医師法から戦後の医師法へと脈々と受け継がれているのではないのでしょうか。

医療の公共性がより問われる現代こそ、洪庵先生の説いた「人の為」という医師の本旨を改めて心に刻みたいと思います。150年以上前の教えが現代の法律にも通じているということは、医師としての根本的な使命は時代が変わっても普遍的なものだということでしょう。診療や研究など日々の業務に追われがちですが、迷いや困難に直面したときこそ、「扶氏医戒之略」に立ち返ることで、医師としての原点を見つめ直すことができるのではないのでしょうか。

馬場幸子(平16)

公益社団法人 医学振興銀杏会 正味財産増減計算書 2024年4月1日から2025年3月31日まで						(単位：円)
科 目	前年度	当年度	当年度内訳			
			公益目的事業	共益事業	法人会計	
I 一般正味財産増減の部						
1. 経常増減の部						
(1) 経常収益						
基本財産運用益	125	167	167	0	0	
特定資産運用益	3,915	5,333	4,054	1,279	0	
受取会費	22,950,000	23,595,000	13,500,000	6,895,000	3,200,000	
事業収益	178,000	2,425,000	128,000	2,297,000	0	
受取寄附金	7,081,000	9,369,100	7,000,100	2,009,000	360,000	
受取寄附金振替額	18,272,332	17,488,070	17,488,070	0	0	
雑収益	12	430	430	0	0	
他会計からの繰入額	0	0	0	0	0	
経常収益計	48,485,384	52,883,100	38,120,821	11,202,279	3,560,000	
(2) 経常費用						
支払助成金	21,950,000	21,350,000	21,200,000	150,000	0	
支払寄附金	500,000	0	0	0	0	
地域医療ネットワーク費	325,634	187,485	187,485	0	0	
通信運搬費	1,961,007	4,776,109	419,952	3,712,812	643,345	
印刷製本費	2,436,183	7,250,317	1,327,699	5,674,790	247,828	
コンピューター費	370,642	91,589	91,589	0	0	
給与手当	13,489,465	14,004,410	11,203,528	1,400,441	1,400,441	
退職給付費用	1,980,000	1,300,000	1,040,000	130,000	130,000	
福利厚生費	2,924,182	2,918,407	1,850,199	231,274	836,934	
旅費交通費	479,689	491,164	377,024	46,720	67,420	
消耗什器備品費	27,004	220	110	0	110	
消耗品費	47,779	132,177	126,608	0	5,569	
修繕費	0	0	0	0	0	
光熱水料費	13,052	171,729	137,383	0	34,346	
支払手数料	388,694	343,907	240,253	74,745	28,909	
減価償却費	111,123	106,590	106,590	0	0	
会議費	180,017	184,845	0	0	184,845	
新聞図書費	20,945	9,497	0	0	9,497	
研修費	230,388	119,248	119,248	0	0	
雑費	19,120	20,250	0	0	20,250	
経常費用計	47,454,924	53,457,944	38,427,668	11,420,782	3,609,494	
評価損益等調整前当期経常増減額	1,030,460	△ 574,844	△ 306,847	△ 218,503	△ 49,494	
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0	
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0	
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0	
評価損益等計	0	0	0	0	0	
当期経常増減額	1,030,460	△ 574,844	△ 306,847	△ 218,503	△ 49,494	
2. 経常外増減の部						
(1) 経常外収益						
固定資産売却益	0	0	0	0	0	
経常外収益計	0	0	0	0	0	
(2) 経常外費用						
固定資産売却損	1	0	0	0	0	
経常外費用計	1	0	0	0	0	
当期経常外増減額	△ 1	0	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	1,030,459	△ 574,844	△ 306,847	△ 218,503	△ 49,494	
一般正味財産期首残高	87,666,274	88,696,733				
一般正味財産期末残高	88,696,733	88,121,889				
II 指定正味財産増減の部						
受取寄附金等	34,040,300	15,330,300	15,330,300			
一般正味財産への振替額	18,272,332	17,488,070	17,488,070			
当期指定正味財産増減額	15,767,968	△ 2,157,770	△ 2,157,770			
指定正味財産期首残高	64,036,775	79,804,743	79,804,743			
指定正味財産期末残高	79,804,743	77,646,973	77,646,973			
III 正味財産期末残高	168,501,476	165,768,862				
ホームページも公開しております。ホームページアドレス https://www.ichou.or.jp/joho.html						
助成金事業採択者一覧(敬称略)。1、2、3は令和7年5月31日総会で授与式を執り行いました。)						
1. 2024年度 地域医療に関する研究助成、3件、各50万円						
浦川ひかり：産後腰痛に対する予防・診断・治療介入体制の構築						
川岸耕太郎：肺切除後の気管支断端癒着発生リスクの検証と予防のための手術戦略の確立						
中野剛佑：膀胱全摘除術の術式進歩が膀胱浸潤性膀胱がんの治療成績に与える影響の検討及び治療標準化への挑戦～多施設共同研究～						
2. 2025年度 学友会奨学金採択者、15件、各20万円						
学部学生：稲田 彪、植木裕也、坂本裕紀、田口武人、玉川睦絵、田村 響、豊田浩亘、名倉慎吾、西村洋志、松本昂之、水野颯太、矢野啓人						
大学院生：井上采人、WANG XINYI、SHRESTHA KRITI						
3. 2025年度 岸本基金奨学助成金採択者、12件、1年次：60万円、2～6年次：120万円						
(1年次)田中巴那 (2年次)田島卓実 (3年次)堤 美紅、長島真由 (4年次)田代大貴、水野佐和子 (5年次)竹下航平、永安郁弥、森 裕一朗						
(6年次)榊 湊、鏑本侑志、花輪望未						
4. 2024年度 国際学術交流助成事業 13件 8～20万円						
青山修平(消化器外科学、新加坡)、北原貴之(整形外科、米)、楠 響子(消化器外科学、阿蘭陀)、河野壮太郎(整形外科、阿蘭陀)、小林又三郎(精神医学、阿蘭陀)、佐藤 悠(消化器内科学、米)、田代 拓(消化器内科学、米)、田伏真理(産科学婦人科学、加)、野田成美(呼吸器・免疫内科学、阿蘭陀)、林 理絵(消化器外科学、韓)、伴田一真(心臓血管外科学、米)、森 梨沙(統合生理学、米)、山本玲奈(保健学専攻、米)						



…その 173

高齢者施設とACP

厚生労働省は、団塊の世代が全員75歳以上の後期高齢者になる2025年問題に向けて、病院機能分化と連携による地域医療構想と多職種連携による地域包括ケアシステムの推進を目指し、CureからCareを合言葉に入院から在宅へ舵を切った。また、終末期において自分が希望する医療やケアを受けるにあたって大切にしていることを前もって考え、家族などの親しい人やかかりつけ医などの信頼できる人たちと話し合い、自分の意思を共有する取り組みとしてAdvanced Care Planning (ACP: 人生会議) を推進してきた。人生会議という日本語表記が妥当かはともかくとして、終末期を迎えるときにどのような最期を迎えたいかを明確にしておくことは、患者さんにとっても医療従事者にとっても非常に好ましいことである。患者さんの望まない延命治療を行うことは、我々医療従事者にとっても大変ストレスである。

それではACPの普及状況はどうかというと、残念ながら広まっているようには感じない。少しずつではあるが在宅看取りを選択される方は増えており、かかりつけ医や訪問看護師のサポートを受けている方にあってはACPが実行されるようにはなってきたが、一方で、高齢者施設においては、遅々として進んでいないように思われる。高齢者施設からACPの結果が分からずに当センターの救命救急センターに搬送される患者は月に10例程度あり、その

内家族が来院後に積極的な治療を望まない患者が8〜9例であった。望まない延命治療が施行されてしまった症例も少なくない。

高齢者施設に聞き取り調査を行うと、多くの施設で入所時には医療介護についての希望聴取は行われており、看取りまで行う施設も増えてきた。しかしながら、繰り返しのACPはほとんど行われず、行われたACPの情報も職員全体に周知されていない。特に、人手不足のため夜間休日は非常勤職員に任せている施設も多く、入所者との繋がりも薄く情報の共有は難しい。さらには、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅にあっては医師の配置義務はなく、管理医師や配置医師を置いている高齢者施設でも、休日夜間などは救急車を呼ぶように指示されることも多いようである。

高齢者施設でのACPや看取りを増やすために認可基準を厳しくすることも一案であるが、高齢者のための居住場所の確保も重要な課題である。今後、2040年問題に向けて、人口減少社会の中でも増え続ける後期高齢者の方々に対し、患者さんも医療従事者も皆が納得できる医療介護の提供体制の確立を切に望む。

今回は、地方独立行政法人市立東大阪医療センター理事長の辻井正彦先生(昭59)にお願いしました。

地方独立行政法人りんくう総合医療センター 病院長
松岡哲也(昭60)

事務局からのお知らせ

<会費納入について>

年会費 5千円

ご入金のお済みでない方には、過去3年間の納入状況を記載した郵便振込用紙を同封しています。ご入金の程よろしくお願い致します。

※銀行口座からの自動引落をご希望の先生は事務局までお問い合わせください。

● 連絡先(ご投稿や住所変更の際にご活用ください)

【宛先】〒565-0871 吹田市山田丘2-2 大阪大学医学部内

大阪大学医学部学友会行 または

E-mail:office@ichou.med.osaka-u.ac.jp まで。

<ご案内>

ホームページ(<https://www.ichou.or.jp/>)を開設しております。

地域医療ネットワーク強化事業でもある「銀杏メディカルネット」ならびに、研究助成公募等の情報も掲載しております。ご興味のある方は是非ご覧ください。住所変更等は、ホームページ「会員情報の変更」よりお知らせください。

<原稿募集>

● 学友会ニュース

○支部会、クラス会の投稿を募集のお知らせ

掲載ならびに文章の体裁については編集委員会に御一任下さい。

投稿規定:400字以内、集合写真1葉(写真はなくても結構です)

締切:令和7年11月10日必着

○令和8年新年号ニュース表紙写真募集のお知らせ

1.公益社団法人医学振興銀杏会会員本人が撮影した作品であること。

2.デジタル画像データ(JPEG)またはカラー写真を送付ください。

3.作品についてタイトル、説明文(200字まで)を添えてください。

4.同時に投稿できる写真は1点までとします。

5.学友会ニュース編集委員会において掲載について決定いたします。

6.肖像権やプライバシーについて本会は関与しません。投稿会員ご本人が十分ご注意ください。

7.お送りいただいたデータ等は返却致しかねます。

8.掲載歴があっても著作権等に関わらないものは応募可能です。なお、掲載歴については記載願います。

9.匿名での掲載も可能とします。但し、卒業年度は掲載いたします。

締切:令和7年10月31日必着

トピックス

細胞内のゴルジ体の解剖と糖鎖合成との関わり

ゴルジ体は糖鎖合成に必須な細胞小器官で、細胞の核近くでゴルジリボンと呼ばれるクラスターを形成している。我々は超解像顕微鏡でゴルジ体の形態を観察し、細胞内で直径1-3 μm のリング状の小さいゴルジ体が散在し、核近くの大きなゴルジ体ではそれらが横につながっていることを観察した(図)。我々はこのリング構造がゴルジ体を形成する単位と考え、ゴルジユニットと命名した。哺乳類では細胞の種類に関係なく普遍的にゴルジ体はゴルジユニットが連結された構造を取る。

タンパク質への糖鎖付加はタンパク質の生理的機能に必須である。糖鎖付加は糖鎖合成酵素(糖転移酵素)によって行われるが、糖鎖合成酵素が生理的な発現状態でゴルジ体の平面内のどこに局在するかはこれまでわかっていなかった。我々は上記のゴルジユニットにおいて、3種類の異なる糖鎖(N型、O型、GAG(プロテオグリカン修飾する糖鎖))を各々合成する初期の酵素の局在を超解像顕微鏡で観察した。すると、O型とN型の糖鎖合成酵素はほぼ完全に共局在するが、O型とGAGの合成酵素は殆ど共局在しないことが判明した。更に、これらの糖鎖合成酵素は別々の小さな個別の領域を占めているため、これらの領域を「ゾーン」と命名した。更に、3つの酵素のゾーンの面積を測定したところ、N、O型糖鎖合成酵素のゾーンはGAG合成酵素よりも大きいことが判明した。

また、ゴルジユニットが単独に存在するときのみならず、クラスターを作る場合もユニット内に3種類の糖鎖合成酵素のゾーンがもれなく含まれていたため、ゴルジユニットは構造的のみならず機能的にもゴルジ体の基本単位と考えられた。

ゴルジユニットのライブイメージングを行ったところ、大きなゴルジユニットに仕切りが入って小さなユニットが切り分けられ、それが元のゴルジユニットの集団から分離して移動して他の集団に接触したり、時にはゴルジユニット同士がつながって大きなゴルジユニットになることが分かった。

更に糖鎖合成酵素のゾーンのダイナミクスをライブイメージングで観察したところ、O型、GAG糖鎖合成酵素はゴルジユニットの辺縁部近くを活発に動き回るが、これら2種類の酵素のゾーンはほぼ相互排他的に動き回ることも明らかとなった。

我々はゴルジ体が単なる大きな膜からできている構造ではなく、小さなユニットが集合してできていることを示した。ゴルジ体がこのように構築されることは糖鎖合成のために大きなメリットがあると思われる。つまり、

小さなゴルジユニットに3種類の糖鎖修飾酵素が全て含まれ、それらがユニットの辺縁を動き回ることによって、短時間の間に酵素と基質が高い確率で出会うことができ、効率よく多くの種類の糖鎖修飾を行えるようにしていると考えられる。

では、ゴルジユニットが集合する生理的意義は何だろうか?ハエ、線虫、植物ではゴルジ体は分散している。面白いことに哺乳類でゴルジユニットが分散するとGAG合成酵素はユニットごとの差が大きくなり、その結果プロテオグリカンの合成量が低下する。このことから、ゴルジユニットが分散するハエや線虫、植物では骨、軟骨がないため、プロテオグリカンの効率よい合成は必要ないためゴルジ体を集合させる必要はないが、骨軟骨がある脊椎動物以降、ゴルジユニットを集合させてプロテオグリカンの合成効率を上げることが必要となった可能性が考えられる。

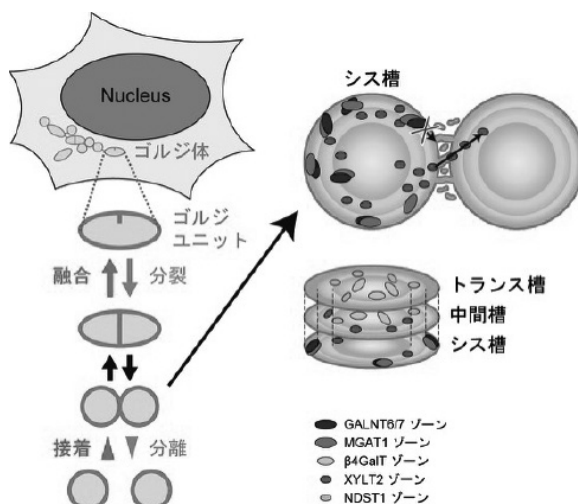


図
左: 細胞のゴルジ体はゴルジユニットからなり、ゴルジユニットは融合、分裂、接着、分離などのダイナミックな動きを呈する。
右: ゴルジユニットの拡大図。O型糖鎖合成酵素GALNTのゾーンやN型糖鎖合成酵素MGAT1のゾーンは面積が大きく、GAG合成酵素XYLT2のゾーンは面積が小さい。

文献

A Harada et al. Dynamic movement of the Golgi unit and its glycosylation enzyme zones. Nat. Commun. 15, 4514 (2024)

診療科 紹介

麻酔科・集中治療科

当教室は、昭和40年に大阪大学医学部麻酔学講座として開講しました。昭和40年10月、旧阪大病院の食堂でささやかな麻酔学講座発足イベントが開催されたと聞いております。講座開講メンバーは、恩地裕初代教授をはじめとする7名でした。翌年昭和41年には麻酔科外来、いわゆるペインクリニックを全国に先駆けて開設。そして、昭和49年には全国2番目となる大阪大学医学部附属病院集中治療部を開設し、現在に至るまで24時間クローズド診療体制を続けております。このように当教室の歴史を振り返ると、我々の教室は大麻酔科主義を源流として、諸先輩方のたゆまぬ努力により大きく発展を遂げてきたことがよく分かります。手術麻酔だけでなく、集中治療・緩和疼痛・（現在では）無痛分娩管理といった麻酔関連領域すべてを学問の対象とする、これが我々の考える麻酔科学であり当教室の誇るべき伝統であると思います。

当院は、臓器移植をはじめとする侵襲の大きな手術を実施し、高度先進医療を提供する地域の中核病院として地域の要請に応える使命を有しております。現在、年間の麻酔科管理症例は7000例を優に超えますが、患者さんの安全を最優先にしながら、さらに拡大を進めて参ります。また、統合診療棟運用開始に伴い29床のICUが旧棟と新棟の2つに分かれ、重症患者さんの集中治療管理を継続しますので、これまで以上に各診療科との連携が重要になってまいります。私は、「先輩方の築いてきた大麻酔科主義の伝統をしっかり」と守り、

伝統という基盤の上に当教室の価値をさらに高めていくことを教室運営の基本方針に掲げております。伝統を守り価値を高めるために、何が必要なのか、それは「専門性」と「学問性」を追求する麻酔科医を一人でも多く育成していくことだと考えます。そのために、当教室伝統の大麻酔科主義という利点を生かし、手術麻酔早期特化ではなく、麻酔科全体の中から将来の専門性を模索できる教育体制を提供しております。麻酔科専門研修プログラム中、専攻医は手術麻酔・集中治療・緩和疼痛・無痛分娩管理といった麻酔関連領域すべてを経験することができるため、多くの選択肢の中から自身にあった専門性を早い段階で見つけることが可能になります。このように充実した教育体制を通して、「私はXXを専門とする麻酔科医です」と胸を張って言える麻酔科医を輩出することが当教室の使命です。このように目標を明確に提示することで後進を向かうべき方向に導いていく、その結果、常に最高レベルの臨床を患者さんに届ける。そのような教室でありたいと考えています。

私は、教室運営の基本方針を掲げながら、高い「専門性」と「学問性」を有する熱意溢れる後進の育成に全力を注ぎ、これまで以上に教室並びに病院発展のために貢献していく所存でございますので、学友会の先生方におかれましては一層のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

吉田健史（平15・三重大医）

